

# 平成29年度「木下の森」活動報告

## 「青少年研修プログラム」の実施

熱帯雨林再生のための植林活動が終了し、一昨年末に国立公園(永久保護区)となった、マレーシア・サラワク州スリアン地区アペン国立公園内にある「木下の森」において、地域の子供たちや日本の青年たちが、森林保全の大切さを学べる『青少年研修プログラム』を実施しました。

## プログラム1 地域の子供達を対象としたプログラム

「木下の森」にて、地域の子供たち(小中高校生)、教員、大学生、村人を招き、植林・メンテナンス作業体験や、トレッキングなどにより森林保全の大切さを学ぶプログラムを2回実施しました。

### ● 第1回「青少年研修プログラム」

日 時:8月12日(土) 午前10時～午後1時

場 所:アペン国立公園内「木下の森」活動地域

参加者:バライ・リンギン中校生の生徒38名と教員5名、クライト小学校の教員7名、マレーシア・サラワク大学の大学院生4名と教員3名、サラワク州森林局幹部とスタッフ3名、トン・ニボン村村長と村人20名が参加しました。

内 容:フタバガキ科在来種400本の苗木を皆で植林。作業を通じて、地域の貴重な財産である熱帯雨林の再生と保全の大切さを学びました。

### ● 第2回「青少年研修プログラム」

日 時:3月4日(日) 午前10時～午後1時

場 所:アペン国立公園内「木下の森」活動地域

参加者:セント・ノバート小学校の児童9名、教員5名、クライト小学校の教員1名、バライ・リンギン中高校の生徒31名、教員1名、マレーシア・サラワク大学生13名、教員3名、日本の大学生9名、教員2名、トン・ニボン村村長と村人20名、サラワク州森林局スタッフ2名が参加しました。

内 容:フタバガキ科在来種400本の苗木を皆で植林。作業を通じて、地域の貴重な財産である熱帯雨林の再生と保全の大切さを学ぶとともに、地域の人々が参加することの意義について意見交換を行いました。  
終了後、セント・ノバート小学校の児童が植林体験をもとにした絵を作成しました。

## 平成30年3月に参加したセント・ノバート小学校児童による絵画

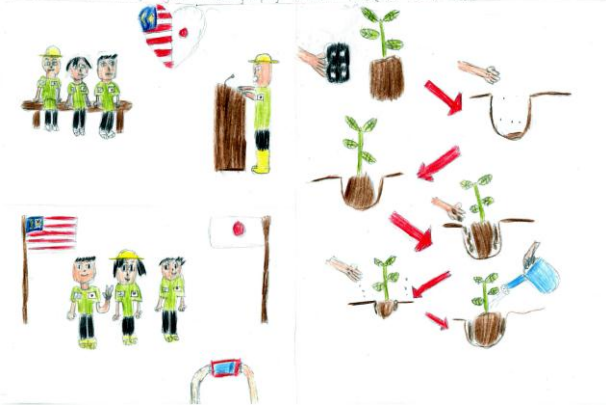




George Alex



School: SK St. Markus Pagar Gunung  
 Name: Aldin, Andy and Alexander Gai (Xiao-Fu)  
 Project: Tree Planting Project at Gunung Apeng National Park (6th March 2018)



Anna





## 活動の様子



植林活動の説明を受ける(平成29年8月)



木下グループの方々と共に植林作業体験(平成29年8月)



植林活動について意見交換(左)  
参加者全員で(右)  
(平成29年8月)





感想文を提出したバイリンギン中高生へ記念品贈呈  
クライト小学校教員へ参加証贈呈(平成29年11月)



マレーシア・サラワク大学教員が森林保全の意義について講話(左)  
植林方法について説明を受ける小学生(右)(平成30年3月)



植林体験をする児童たち(平成30年3月)





植林作業後、感想を語り合う  
中高生(左)、小学生(右)  
(平成30年3月)



参加者全員で  
(平成30年3月)



## プログラム2 日本の青年を対象としたプログラム

「木下の森」の活動を通じて、環境保全等の社会貢献活動に関心を持つ日本の青年を育成する事を目的に、日本の大学生を対象としたプログラムを実施。日本国内で1日植林活動概要について事前研修を行った後、「木下の森」の地域村落に寝泊まりしながら研修を実施。現地の政府機関や大学等を訪問し、「木下の森」プロジェクトの意義について学びました。

### ● 「木下の森」青年海外研修プログラム

日程:8月8日(火)~13日(日)

参加者:加反真帆(筑波大学4年)、池田涼未(東京外国語大学3年)

随行者:森嶋彰 広島修道大学名誉教授

新井卓治 公益社団法人日本マレーシア協会専務理事

- 8月8日(火) 午前 成田発  
夜 マレーシア・サラワク州クチン着  
クチン泊
- 8月9日(水) 午前 マレーシア・サラワク大学資源科学技術学部訪問  
同大学の「木下の森」活動地における植生調査活動を学ぶ  
午後 セメング自然保護区訪問  
同保護区内の動植物と隣接するランデ保護林にて約80年前の植栽木を観察  
夕刻 木下グループ視察団の方々をクチン空港でお出迎え  
クチン泊
- 8月10日(木) 午前 サラワク州森林局訪問  
木下グループ視察団に同行し、ジャック・リアム副長官を表敬訪問し、サラワク州における「木下の森」プロジェクトの実績や、持続的な保全活動への取り組みなどについて学ぶ  
午後 トン・ニボン村訪問  
スリアン地区アペン国立公園に隣接するトン・ニボン村へ移動し、村の農園でアブラヤシの収穫作業体験のほか、コショウ畑や養魚池の観察を行う  
トン・ニボン村でホームステイ
- 8月11日(金) 午前 「木下の森」活動地域にあるセント・ノバート小学校訪問  
木下グループ視察団と合流し、交流会に参加  
午後 アペン国立公園内の「木下の森」植林プロジェクト活動地にて、視察団の方々と共に植林地の視察やメンテナンス作業体験を実施  
夕刻 トン・ニボン村の女性と伝統的な編み籠づくりに挑戦  
トン・ニボン村でホームステイ
- 8月12日(土) 午前 アペン国立公園内「木下の森」活動地域を訪れ、森林保全の大切さを学び、植林作業などを体験する「青少年研修プログラム」に、木下グループ視察団の方々と共に参加  
400本の苗木を共に植える作業を通じて、森林劣化地域における熱帯雨林再生方法について学んだほか、熱帯雨林の重要性や、地域住民が参加する保全活動の意義などについて学んだ  
夕刻 木下グループ視察団の方々と夕食を共にし、役員や社員の方との会話を通じて、企業による社会貢献活動について知るだけでなく、自らの進路についても考える機会となった  
クチン泊
- 8月13日(日) 早朝 クチン発(マレーシア航空)  
夕刻 成田着、解散





# 青年海外研修プログラム 研修生報告書(平成29年9月)

加反真帆

筑波大学生命環境学群生物資源学類4年

## はじめに

- 私は現在、筑波大学の生命環境学群生物資源学類 社会経済コースにおいて、林政の研究室に所属しています。そこには、主に東南アジアなどの熱帯地域において、各政策がもたらす影響を研究している学生が多く在籍しています。私は2017年2月から6月まで、インドネシアの西ジャワ州 ボゴール市にあるボゴール農科大学(IPB)に交換留学をしていました。
- そこでは、授業をとることはもちろん、私の卒業研究のテーマである「コーヒー農家の生活水準に影響を及ぼす要素」の調査を行いました。そこで初めてフィールドワークというものを経験しました。また、イスラム教に触れたことがなかったので言語・文化・宗教すべてが初めての経験ばかりで戸惑うことも多く、苦労しました。しかし、少しずつインドネシア語が話せるようになり、現地の人々とコミュニケーションが取れるようになってきたころ、毎日の生活が充実したものになっていっていると肌で感じました。インドネシアの人と手を使って食事をし、恐れずにコミュニティに入っていく私の姿勢はとても珍しい日本人だと喜んで受け入れてもらったことが私の自信にもなりました。しかし4カ月間という短い期間であったために、もっと学ぶことがたくさんあったと少し心残りに感じておりました。
- その時、日本マレーシア協会の「マレーシア・ボルネオ島青年海外協力研修」の募集を知り、すぐに応募させていただきました。幸いにも機会を与えていただき、その知らせを聞いたときは「また、現地の人々と心を通わせた会話ができる！」とうれしさをいっぱいでした。植林に関しても、座学でまなぶことはありますが、実際に行ったことはなく、企業が運営する巨大なオイルパーム農園も写真のみでしか見たことがなかったので、イメージがはっきりと持てませんでした。なので、実際にボルネオ島に行って、貴重な経験ができることが楽しみでたまりませんでした。また、私は東南アジア料理、特に辛い料理がとても好きなので、次はどのような新しい現地の料理に出会えるのか、そしてどのような民族の方々に出会えるのか、とても楽しみでした。
- この研修で私が得たかった最も大きな事は「経験」でした。本や論文では知識は得られても、自分の経験ではないために、説得力のある発言がしにくいと日々感じていました。自分の言葉で自分の経験に基づき、自分の考えを述べられるようになりたいと思っておりました。

## マレーシア・サラワク大学 (UNIMAS) 資源科学技術学部訪問

- UNIMAS資源科学技術学部を訪問し、同大学による森林調査活動などについて説明を受けました。その後、教授や学生と意見交換を行いました。植林地であるGunung Apengで実習を行う学生など、私たちが後日植林を行う地域をフィールドとして研究されている方のお話を聞くことができました。社会科学を専門とされている教授のお話の中にあつた、学校から遠く離れた村に住む子供たちは通うことに疲れていたが、道路が整備され、電子機器を持ったことにより情報が得られ、学ぶ姿勢が変わったということが印象的でした。情報を得て、考え、実行に移すことは当たり前のことのように、まだまだ情報が得られず森の奥に住む子供たちが多くいることを知り、森に直接かかわる人々への教育が森林保護にとって大切だと感じました。またGunung Apengが2016年末に国立公園(National Park)となったことや、プロジェクトエリアに小中学生を招待することによって周辺住民への理解を得られることができると学びました。植林活動というのは、生物資源科学の問題だけではなく、人間社会科学の問題でもあるということが分かりました。

## セメゴ自然保護区にてオランウータンの生態観察

- 私はオランウータンを実際に見たことはなかったので、とても楽しみにセメゴ自然保護区に訪問しました。午後3時のセメゴ自然保護区はまさに熱帯雨林といったような湿気と暑さに包まれていました。そんな中沢山の人がオランウータンの訪れを今か今かと心待ちに、そして静かに待っていました。けれど、オランウータンは私たちの前に姿を見せてくれず、空振りのまま自然保護区を後にしました。一見運が悪かったととらえがちですが、オランウータンはもう自分で餌を見つける力が付き、餌やりの時間に戻ってくる必要がなくなったのかもしれない、ととらえることができます。本当はお腹が減っていなかっただけかもしれませんが、勉強になりました。

## ランデ保護林にて80年前の植林地を観察

- ボルネオ島サラワク州はかつてイギリスの植民地であり、ランデ保護林にはイギリス人が植林していた木が残っていました。80年前の植林地を見たとき、自然の偉大さを感じました。80年前は私の両親さえ生まれておりません。そんなに昔からこの木は存在し、育ってきたと考えると、需要があるからとつてむやみに伐採してはいけないと感じました。
- また、植林後も手入れが必要なために、植林したところには目印がつけられていることもここで初めて学びました。

## サラワク州森林局を訪問

- サラワク州森林局を訪問し、熱帯雨林再生活動について説明を聞かせていただきました。1996年から日本人のボランティアにより植林活動が開始されていると知りました。そして、サラワク州は国際熱帯木材機関(ITTO: International Tropical Timber Organization)の水準に基づいた理想的な経営が行われていると局長がお話されたので、私の中にある疑問が生まれました。
- その疑問とはボルネオ島はインドネシア領のカリマンタン、ブルネイ、マレーシア領のサバ・サラワク州と分けることができますが、ボルネオ全体で見て、どのように優れているのか、そして、ボルネオ島全体で目標を設定して協力するようも各州別個に経営を行った方がよいのかという事でした。局長はサラワク州を他の州政府やインドネシア、ブルネイと比較する発言は避けられましたが、HOB(Heart Of Borneo)という、約220,000km<sup>2</sup>の森林地域を保護するための保護協定が存在することを教えてくださいました。
- 各州政府でのローカルな視点での目標設定も重要だと考えますが、類似した条件にある他地域とともに大きな目標設定をし、情報を共有していくことがボルネオ島全体の自然保護につながると感じました。帰国後様々な論文を読み、私なりに感じた問題点として、インドネシアはかつてオランダ領であったことや、ジャワ島からの移民など、マレーシア領と違った側面を持つことにより森林の状況や環境倫理の観念も少し変わってくるのではないかと考えました。これは今後の私の研究テーマにもつながると考えております。

## トン・ニボン村へのホームステイ

- マレーシアに到着して3日がたち、ついに植林地があるエリアへ向かいました。トン・ニボン村に到着後、すぐにオイルパーム農園に行き、収穫の体験をさせていただきました。パームオイルのプランテーションによる森林破壊という言葉は何度も耳にしていました。しかし、実際に見たことはなく、とても貴重な経験をさせていただきました。村長の孫は村長たちをまね、落ちた身を率先して広っていました。その姿は大人顔負けで、私も頑張って実を拾いました。そして収穫に加え、オイルパームの実を火であぶって食べさせていただきました。オイルいうだけあって、火にあぶると火がさらに強く燃えていました。そして、実はオイリーで、想像以上に美味しく感動しました。



- トン・ニボン村は完全な自給自足を行っている村であり、村長は私たちのために、生け簀の魚や家畜の鶏、さらに私の大好きなドリアンなど沢山の伝統料理を振る舞ってくださいました。東南アジア料理と言えば、辛い料理や揚げ物を連想しますが、ここでの料理は新鮮で野菜もたくさんあり、日本人の嗜好に合うのではないかと感じました。インドネシアに留学中、たくさんの鶏を食べましたが、どの鶏もあまりおいしく感じませんでした。しかしトン・ニボン村の鶏は本当に新鮮でとても美味しかったです。
- 早朝は鶏の鳴き声により目が覚めました。村長の家から近くの新しく建設中の小学校までランニングをし、村の雰囲気を感じることができました。村の人々は、私たちが小学校まで走ったと言ったらとてもびっくりし、笑っていました。
- また、村の女性達に籠編みを教えていただきました。村の女性達はとても恥ずかしがり屋で、外国人の私達と会話することにあまり慣れていないようでした。そのため、私が積極的に教えてくださいという姿勢を見せないと、どんどんと編まれていったので頑張って話かけ、一緒に製作することができました。夕食後は村長の一族やともに働く男性たちも家に集まり、地酒を振る舞ってくださいました。こうしてともに団らんすることは、村へのコミュニティへ入ることにつながり、その姿勢は植林活動の中でも心のつながりが発揮されると考えます。

### 「木下の森」青少年研修プログラムに木下グループ視察団と共に参加

- そして、最終日ついに植林活動を行いました。村に滞在して3日目ということもあり、村の方々とも大分打ち解けてきたころに共に植林活動が行えました。私は25本の樹を植林しました。UNIMASの学生や近くの高校生が手伝ってくれました。とても手際がよく、どんどんと植林が進みました。しかし、大切なことは苗木をただ植えることではなく、住民参加型の植林を今後どう持続的に成功させていくか考えることだと思いました。私はたった3日間ほどしかトン・ニボン村に滞在することができず、住民の方々にどれだけの影響を与えられたかはわかりません。
- つたないインドネシ語で植林後に挨拶したとき、村の人々が笑顔になってくれた時、とてもうれしかったです。伝わらなくても伝えようとする姿勢や、森を守って行こうという意識は共有できたのではないかと感じます。日本マレーシア協会の新井さんは、マレー語よりさらに地域に特化した、村のビダユ語を覚えようと努力されており、村の人々にとって家族のような存在であると感じました。今日も私たちが植えた木を手入れしてくださっているトン・ニボン村の方々に感謝して、自分の研究を深めていこうと考えます。
- 最後になりましたが、私の人生にとって本当に貴重な機会を下さった、木下グループの皆さま、そして日本マレーシア協会の皆さまに心より感謝申し上げます。この経験は、私のこれからの人生に大きな意味があったように思っています。ありがとうございました。

池田涼未

東京外国語大学国際社会学部3年

- 私は東京外国語大学国際社会学部3年に所属し、マレーシア語を専攻しています。大学に入学しマレーシア語を勉強していく中で、マレーシアの文化や宗教に深く興味を持ち、実際にマレーシアへ行きたいと強く願うようになりました。そして、大学1年生の春休みに念願叶って初めてマレーシアへ行き、ホームステイや現地学生との交流を経験する中で、文化的側面だけではなくマレーシアの自然環境にも興味を持つようになりました。



- 実際に訪れる前までは、東南アジアにあるマレーシアを熱帯雨林が多い茂る自然豊かな国だと思っていました。しかし実際には、想像通りの自然豊かな田舎もありましたが、クアラルンプールのような東京にも劣らない大都会もありました。さらに、一見自然が多く残っているようにみえても、実はアブラヤシのプランテーション農場だということなど新たな発見も沢山ありました。
- 今回、2017年度マレーシア・ボルネオ島「木下の森」青年海外協力研修に参加する機会が与えられました。半島マレーシアよりも森林が多く残るといわれているボルネオ島サラワク州の現状を知り、実際に環境保全活動に参加することで、将来どのようにマレーシアや環境問題に自身が関わっていけるかを考えることを目的にこの研修に応募しました。
- この報告書では、この研修で経験した「マレーシアの州や国を挙げての自然保護活動」、「トン・ニボン村でのホームステイ」、「現地のマレーシア人との植林活動」について最初に説明、報告するとともに、最後にこの海外研修を通して感じ考えたこと、また自身のこれからの自身の活動について言及したいと思います。
- 今回の研修では、マレーシア・サラワク大学(Universiti Malaysia Sarawak)やサラワク州森林局といった施設を訪問し、マレーシア、中でも特にサラワク州が積極的に自然保護活動に取り組んでいることを実感しました。マレーシア・サラワク大学では、資源科学技術学部を訪問し、同大学の教授や学生から実際に大学で行っている研究や自然保護のための活動などについて説明を受けました。より良い森林を形成するための「造林学」という用語を初めて知り、土壌や日光、肥料などさまざまな点に注目し研究を行っている同年代のマレーシア人学生から刺激をもらいました。また、ピートと呼ばれる泥炭地がボルネオ島にもあり、その燃えやすい土の性質から泥炭火災による環境問題も深刻であるということも学びました。
- サラワク州森林局では、木下グループ視察団の皆様と合流し、森林局の副長官からサラワク州の森林の状況について説明を受けました。中でも最も印象的だったのは、サラワク州の62%が森林であり、さらに、マレーシアの中で一番国立公園が多いのもサラワク州であるということです。サラワク州独自に森林条例を設け、「森林に暮らす住民の利益を十分に保護する」ことをモットーに、住民に配慮しつつも積極的に森林保護に取り組む姿勢にとても驚きました。
- 次に、トン・ニボン村でのホームステイについてです。トン・ニボン村はクチン中心部とは違い、自然豊かな田舎の村でした。2泊3日で村長さんのお宅に泊めていただき、アブラヤシ農園や胡椒の栽培、魚の生け簀など、日本ではなかなかできない体験をしました。
- 毎朝ニワトリの鳴き声で目覚め、出てくるご飯は基本的に村や自分の家でとれた肉、魚、野菜、まさに自給自足という言葉そのものでした。アブラヤシ農園では実際に収穫も体験し、初めてその実を食べる経験をしました。農園は想像以上に広く、またアブラヤシの実はとても重かったので、収穫には苦労しました。
- また、アブラヤシの実パームオイルになるだけあってとてもオイリーでしたが、意外と美味しかったです。町の中心部からは外れた村でしたが、子どもたちは学校へ行き、大人は働くという構造は日本や他の国と変わらず、決して貧乏だとは感じない暮らしぶりでした。それどころかご近所付き合いや人とのつながりを大切にしたコミュニティに温かみを感じ、夜には家族親戚関係なく村に住む色んな人が村長さんの家に来て談笑を楽しむなど、日本にはない自由でのんびりした時間がトン・ニボン村にはありました。



- また、イバンやビダユなどさまざまな民族が共存していることから話す言葉もさまざま、信じている宗教もキリスト教やイスラム教など人によって異なり、マレー系でイスラム教徒が大多数を占める半島マレーシアにしか行ったことがなかった私にとっては、とても衝撃的で新しいマレーシアの一面を感じることができた経験になりました。
- 今回の研修のメインイベントはアペン国立公園での植林体験でしたが、木下グループ視察団の皆様、さらには現地の住民や学校に通う子どもたち、大学生など多くの人たちと一緒に植林作業をしました。アペン国立公園は、日本マレーシア協会が中心となり熱帯雨林再生活動に取り組んでいる森林地帯で、現地住民の協力や木下グループをはじめとする支援者のおかげで成り立っています。去年アペン保護林から国立公園へと昇格したばかりの森林地帯です。植林自体は苗木を植えるという単純な作業でしたが、雑草と間違えないために目印をつけることや、きちんと列を作って計画的に植えること、また森が良い状態を維持するためには定期的なメンテナンスが必要であることなど。植林をした経験は日本でもなかったのですが、植える前と植えた後に重要な作業があることを知りました。
- 現地のマレーシア人たちが優しく教えてくれたおかげで、楽しみながら木を植えることができました。また、どれだけ日本側が森林を守ろうと努力しても、実際にメンテナンスに取り組むのはマレーシアの現地に暮らす人たちであることを強く実感しました。そのため、現地住民の協力が欠かせず、住民とのコミュニケーションや信頼関係、またこの地帯が国立公園であるということを広く住民に知ってもらうということも、大切な活動要素の1つであると感じました。
- 今回の研修を通して強く感じたことは、環境保全活動には自然環境に関する知識などももちろん必要ですが、それと同時に現地に暮らす人々の理解も大切だということです。私はこの研修に参加し、自分の東南アジアの熱帯雨林や植林に関する専門知識の無さを改めて実感し、力不足を感じました。これから先、東南アジアの自然保護活動により強く関わっていくということを考えると、このような専門知識を得、経験を積むことはとても私にとって課題だと思えます。しかし、現地のマレーシア人とのコミュニケーションや異文化理解という点も、異国の地での環境保全活動には大切な要素だと感じました。
- 日本から外部の人が来て植林活動をマレーシアでするわけですから、お互いのコミュニケーション、特に現地に住むマレーシアの人々の理解はとても大切です。私は幸い大学でマレーシア語を学んでいるため、現地の人との意思疎通は現地語ですることができました。さらに、イバンやビダユなどの多様な民族、イスラム教やキリスト教などのさまざまな宗教を信じる人達が住んでいる、といったマレーシアの特徴を知っていることで現地の人々との不必要なトラブルを避けることが出来るとも思いました。より深く理解し合い、信頼関係を築くためには、現地に対する理解がとても重要だということを感じました。
- 私は2018年の1月から10か月間マレーシアのクランタン州という半島マレーシアの北東に位置する地域に滞在します。クランタンでは現地の中等学校で日本語教師のアシスタントとして働く予定です。現地では日本語教育や日本文化を伝えるといった日本を知ってもらう活動に力を入れる予定ですが、今回の研修の経験を活かし、クランタンでも現地の自然環境や環境保全の状況を知り、問題を見つけ、またその解決に向けてどのようにしていくべきなのか考えながら生活していければと思います。
- またそれと同時に、マレーシアの自然環境の状況をもっと日本人に知ってもらい、深刻な環境問題や素晴らしい自然の残る地域など、良いところも悪いところも知ってもらえるよう活動したいと思います。
- 最後になりましたが、私がこの研修に参加し多くの学びを得られたのは、木下グループの皆様、また日本マレーシア協会の皆様のご支援ご協力のおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



# 活動の様子



都内で事前研修会(平成29年7月)



マレーシア・サラワク大学訪問(左)、ランデ保護林訪問(右)(平成29年8月)



木下グループの方々とサラワク州森林局訪問  
(平成29年8月)





トン・ニボン村の農園で作業体験(左)  
村の女性から編み籠づくりを習う(右)(平成29年8月)



木下グループの方々とセント・ノバート小学校を訪問し交流  
(平成29年8月)



「木下の森」活動地でメンテナンス作業を体験  
(平成29年8月)





「木下の森」青少年研修プログラムに参加  
地域の中高生らと植林作業(平成29年8月)



植林作業後、感想を述べる(平成29年8月)



「木下の森」モニュメントの前で木下グループの方々と  
(平成29年8月)